

保育者のためのリカレント教育としての「音楽と動き」に関する一考察

仲 嶺 まり子

Music and movement for child-care workers as recurrent education

Mariko NAKAMINE

はじめに

某空港のロビーで数人の子供達の遊ぶ光景。5, 6人で手をつなぎ輪になり「かごめ かごめ かごのなかのとりは…」とわらべうた遊びをしている。一番小さな男の子が輪の中で両手で目隠しをしてしゃがみ、その周りを女の子達が歌いながらまわっているのだが、ちょうど「うしろの正面だあれ？」と歌が終わると一人の女の子が「うしろにいるの誰だかあてて」と男の子にせき立てるように話しかけた。男の子がしばらくだまっていたので、女の子が「はやく名前を言って！」ともう一度せかすように言うと、ようやく男の子が「〇〇ちゃん」と答え、「あたりい じゃあ今度は〇〇ちゃんが鬼ね」と遊びが続けられていった。

最近、地域社会の中でもこのような子どもの遊ぶ姿を見かけることがなくなったため、私は雑踏の中で偶然発見したわらべうた遊びを驚きを持って見入っていた。

ところで、我々は保育現場において、前述のわらべうた遊びのような「歌と遊び」、あるいは「音楽と遊び」を結びつけたいろいろな動きを伴う活動に取り組んでいる。ピアノやCD等の音楽を使つての模倣表現やリズム表現、また指遊びや創作あそび歌によるコミュニケーション遊びは、保育現場ばかりでなく、子育て支援

や子育てサークル等の場でも幅広く活用されている。それらは子ども達の年齢や発達の程度を考慮しながらも、すぐに楽しめ、子ども達が容易に受け入れられるものが主流となっている。そしてこれらは保育活動を円滑に行うための教材として、保育者にとっては必要不可欠なものなのである。

また、近年大分県内の保育現場の先生方のリトミックに対する興味や意識の高まりから、幼稚園や保育園において外部講師によるリトミック指導が行われたり、公民館や子どもルームにおいても、ボランティアによるリトミック教室が開催されるようになってきた。そのため、保育活動としてあるいは音楽教育の方法として行われるリトミックについては、その相違点を明らかにすることも重要ではあるが、ここでの比較検討は取っておこなわないことにする。

しかしながら、どのような実践形態にもかかわらず、子ども達にとって動きを伴う音楽活動の体験は、自己認識や自己表現さらには他との関係を見出す発展につながり、人間としての生活を営むために必要な素地の育成に有益であることは諸説で論じられている通りである。それ故、筆者は保育者自身にとってもそのような動きを伴う音楽体験の継続が必要ではないかと考えるのである。

保育者が音楽研修に求めるもの

現在、保育現場における保育従事者の多くは、幼稚園教諭、保育士養成校において音楽の基礎知識やピアノ演奏、乳幼児と音楽などを学びながら音楽表現技術を獲得している。しかし、実際に子どもを受け持ちクラスを運営する過程においては、様々な困難に対応しながら保育を行わなければならない。保育者の中にはそのような状況下で、学生時代に学んだ音楽表現技術を活用する方法や方向性を見い出せず、そのことの解決方法を模索しているものも少なくない。

保育における音楽活動の質的向上のためには保育者の継続的な音楽体験が必要であるということは前述の通りであるが、いったいグループ形態での有益な音楽の再体験とはどのようなものが望ましいのであろうか。

これまで筆者はさまざまな保育研修を担当しながら、保育者を対象とした音楽研修のあり方について検討を重ねてきた。簡単な歌や簡易楽器、身近な道具を使いながらの音楽と動きの活動を通して、保育者自身が音楽を楽しみ、またそれらの内容が保育現場の生活と遊離することのないよう創意工夫をおこなってきた。しかし、保育者自身はどのような内容の音楽研修を望みかつ必要としているのかということも重要な視点であり、それらをふまえて研修計画が立てられなくてはならない。

そのため、筆者が担当した研修講座において講座内容の事前アンケート調査（2003年6月、大分市内の保育園11園対象、自由記述形式）を実施した所、次のような希望を窺い知ることができた。「すぐに園で使えるものを教えてほしい」「指遊びをたくさん教えてほしい」「日常簡単にできる歌遊びやリズム遊びを教えてほしい」「ピアノが苦手なのでピアノを使わなくてよい表現遊びを教えてほしい」「発表会で使える曲を教えてほしい」など保育実技としての希望が中心の内容であった。

では、彼らが望んでいるような内容を掲載した教材は入手困難なのだろうか。実は、このよ

うな教材はすぐに入手でき、また種類や数量も豊富なのである。にもかかわらず、多くの保育者が常に上記のような状況にあるのはなぜなのだろうか。考えられる理由としては、今日では次々と送り出される保育関係の音楽情報により、常に新しい曲や道具の利用を求めざるを得ない社会環境であるということと、さまざまな理由から、それらの音楽情報を保育者自身で教材選択することが非常に困難な状況にあるのではないかなどといったことである。そこで、これらのことをふまえて保育関係の音楽出版物についての調査を実施した。

「音楽と動き」に関連した保育実技書について

筆者は、保育者のための音楽の再体験についての研究を目的とし、現在出版されている音楽と動きの結びついた内容が掲載されている保育実技書について調査を実施し、次のように大きく4つの傾向に分類をおこなった。すなわち(1)～(3)については自由な表現活動が中心となっているが、(4)については動きがパターン化されているのが大きな2つの特徴である。

(1) 活動の形態により項目を分類

動きを伴った活動や歌遊び、道具や楽器を使用する活動、童話や創作物語と音楽を関連させたものなど活動形態別に内容編集がおこなわれている。

(2) 音楽の要素から項目を分類

強弱、速度、拍、アクセントやソルフェージュなどのような音楽の要素により内容編集がおこなわれている。

(3) その他月別、年齢別などによる項目の分類

月別や季節毎の指導内容、ねらい別や年齢別に指導内容の編集がおこなわれている。

(4) 振り付けをつけた楽譜を中心に編集

1曲ずつダンスや体育的な振り付け、遊び方が記されている。

もちろん上記項目が重複して編集されている場合もあるのだが、内容の形態としては、それ

ぞれ項目毎に参考曲が提示されており、どの保育実技書においても既成曲と著者自身によるオリジナル曲が活動に応じて使用されている。また、遊び歌や伝承歌のような場合はメロディー譜のみが記載され、こどものうたの場合にはピアノ伴奏が付されているが、簡単な伴奏に編曲されているものが多く保育現場での使用を考慮していることが窺える。さらに、これらは共通して各曲毎にねらいや指導方法あるいは遊び方などの活動例が提案されている。活動例は、段階的に内容を発展させているものと様々な活動内容の提供をおこなっているものに分けることができるが、対象年齢の表示のないものも多い。また年齢が表示されている場合でも、年齢枠にこだわらずに実践するよう書き添えられている。それ以外には、曲の掲載のない表現遊び実技書や動きのテーマに応じた曲のみを掲載している楽譜書も見られた。ところで、(1)～(3)と(4)の特徴は前述の通りであるが、その他にも(1)～(3)については音楽的視点からの編集、(4)については体育的視点からの編集傾向を見ることができる。特に(4)の体育的視点による編集の本のタイトルには「リズム」ということばが使用されているが、(1)～(3)の音楽的視点による編集での本のタイトルには使用されていないことも今回明らかとなった事柄である。これらをふまえ、本のタイトルから分野を識別することも可能ではないかと考えられる。

調査に使用した保育実技書については参考文献欄に記載しているが、上記項目に該当するものをいくつか下記に掲載しているので参照していただきたい。それぞれにおいては、最も中心と思われる編集傾向により分類をおこなっている。

(1) 活動の形態を中心に編集

「ふれあいあそびうた」湯浅とんぼ著 チャイルド本社

「リトミックであそぼう—音楽あそび編—」定成淡紅子著 全音楽譜出版社

「リトミックベストテン」五味克久著 アド・グリーン企画出版

「こんにちは！リトミック」坂本真理子著 オブラ・パブリケーション

(2) 音楽の要素を中心に編集

「あたらしいリトミック」こばやしけいこ著 ドレミ楽譜出版社

「リトミックコーナー」神原雅之、野上俊之 編著 チャイルド社

「たのしいリトミック 全3巻」石井亨、江崎正剛編著 創芸書房

「みんなでやろうリトミック」板野平指導 広瀬蓉子他著 ひかりのくに

(3) 月別、年齢別などを中心に編集

「0～5才児の手あそび歌あそび」阿部直美著 ひかりのくに

「だれでもリトミック」黒岩貞子著 アド・グリーン企画出版

「リトミック百科」石丸由理著 チャイルド社

「リトミック12ヶ月」鈴木明子編著 チャイルド本社

(4) 振り付けをつけた楽譜を中心に編集

「幼児のリズム体操集」松本民子著 チャイルド本社

「ヒット曲でリズムあそび」丸山政敏著 チャイルド本社

「幼児のリズムあそび」日本フォークダンス連盟 フレーベル館

「リズムあそび曲集」井上伸子監修 音楽センター

上記のように多くの「音楽と動き」に関する保育実技書が出版されているが、各実技書の内容は、著者自身による長年の実践の中から抽出選択されたものであり、すべての保育場面へ対応することは困難ではないかと考えられる。そのため、保育者は一冊の実技書のみを参考にするのではなく、多くの資料収集や研究をおこなわなければ自身の保育に活かす音楽表現活動を創っていくことができないのである。

これらのことを考慮すれば、保育者たちが前述したような研修講座に対して常に求めていることの共通性が理解できるのである。

従ってこのことをふまえ、筆者は「保育者のための総合音楽講座」の開催(2003年10月～2004年2月)を企画した。講座は、2,3歳児担当者対象と4,5歳児担当者対象の2つのグループ(各定員25名)に分け、平日(19:00～21:00)に各3回シリーズで実施した。その講座内容については「保育者のための総合音楽講座報告」(「初等教育—研究と実践—」2004別府大学短期大学部初等教育科児童学会)において既に報告をおこなっているが、保育現場の音楽表現活動の内容分類については再考が必要であり、次にそのことについて要約を述べたいと思う。

音楽表現活動における「音楽と動き」の内容分類

「音楽と動き」の結びついた表現活動では、旋律やリズム、歌詞や声、音や楽器、道具などと関連しながら、身体的動きが表されていく。もちろん、その時の活動の状況や子どもの状態により音楽が主体になる場合もあれば、動きが主体になる場合もあるであろう。そこで筆者は、音楽表現活動として保育現場で実践されている様々な活動の内容分類をおこない、それらと関連付けながらいろいろな表現活動の提案を試みることにした。すなわち、保育現場での音楽場面をイメージすることで、保育者自身が体験する音楽表現活動の多様性を知ることとともに、保育における音楽表現の可能性の広がりを見出すことにつながると考え、保育現場で実践されている様々な音楽表現活動を以下のように分類した。

①歌の歌詞に合わせて動きをつけていく

この種の表現は、指遊びや体遊び歌として親しまれている。歌詞に合わせて手や体を動かしたり、さわったりして遊ぶため子どもにとっては安心して取り組み、また保育者や友だちと同じことをしているという喜びも味わうことができることから、日常的におこなうのに適した音楽表現といえる。

②歌のリズムに合わせて動きをつけていく

この種の表現は、リズムのくり返しや曲の中の部分的なリズムを利用して動きをつけていく遊びである。リーダーの真似をしたり、自分で自由に体を動かしたりするので、歌詞に左右されることなくおこなうことができる。例えば模倣活動などにおいて、個性的な表現を子供達に望む声がよく聞かれるが、簡単な動きの経験の蓄積によりその子独自の表現が創り出されていくと考えられるため、表現活動をおこなう上でこのような取り組みは大切である。

③歌とリズムや模倣表現を関連させる活動

この種の表現は、リズムの遅速やリズムパターン、フレーズを利用したり、歌からイメージされるものの模倣表現をおこなったりする活動で、使用する道具の工夫やゲーム性を高めることで活動がより活発化する。

④音や声、リズムを利用した動きや模倣活動

この種の表現は、歌ではなく音やリズムを主体として、リズムの応用や楽器遊び、声を使いながらのユニークな活動が楽しめる。また、ゲーム的な要素を活動の中に取り込むことにより、動きや音に対しての集中力も高まり、子ども達が主体的に活動に参加することができる。

⑤リズム体操やリズムダンス

「ひょっこりひょうたん島」や「どんぐりころころ」、「ずいずいずっころばし」などの歌に振り付けをし、歌いながらあるいは音楽に合わせて踊るといった活動である。動きとしては、ダンスや体育としておこなうような動きが主となるが、友だちと一緒にリズムに合わせて表現することは、一斉活動として統制されているように見受けられるが、共感や共有している喜びを一人一人が味わうことのできる活動でもある。

⑥総合的な表現活動

絵本や物語、行事や日常の出来事などと音

樂を結びつけイメージ表現を楽しむ活動である。ストーリーの展開により、楽曲や歌だけでなく、用いる楽器や道具も工夫することができるため、子どもと保育者がアイデアを出し合いながら協働的に活動をおこなうことができる。

以上のような6つの項目に分類を試みたが、下記に各項目毎の簡単な実践例を記載するので、それぞれの項目の具体的な内容理解の参考にさせていただきたい。

①歌の歌詞に合わせて動きをつけていく

〈参考例〉

「ずっとあいこ」 阿部直美／詞、曲
かにさん、くまさん、あひるさんをグー・
チョキ・パーで表す指遊び
「からだあそびのうた」
志摩桂／詞、イギリスのあそびうた
歌詞の通りに自分の体をさわっていく
「クラゲがふってきた」

藤本ともひこ／詞、曲
両手でクラゲの形を作り、ちょうちよのように動かしながら自分の体にくっつけていく遊び歌だが、友だちとくっつけあいをするコミュニケーション遊びとしてもおこなうことができる。

②歌のリズムに合わせて動きをつけていく

〈参考例〉

「らかんさん」 わらべうた
輪になって歌いながら手合わせを隣にまわしていき、〈ヨイヤサノヨイヤサ〉の時にリーダーが作った動きを次の〈ヨイヤサ〉で真似るとい遊び。

「チェツェツコリ」 ガーナのあそびうた
1小節毎にリーダーの真似をくり返す遊び。

③歌とリズムや模倣表現を関連させる活動

〈参考例〉

「10人のインディアン」

高田三九三／詞、アメリカ曲
元気なインディアンの男の子…かけ足、ごちそうを運ぶインディアンのお母さん…歩

く、威厳のある堂々とした酋長…ゆっくり歩く、など速さの違いをいろんなインディアンで表現する。

「形合わせでリズムング」

○△□のカードを持ち〈いとまき〉の歌に合わせてステップする。ステップは歌の速さに合わせながらおこなう。歌がストップしたら近くの同じ形のカードを持った人と2人組になり手合わせをして向かい合い、音楽に合わせてその場や前後左右に一緒に動きながらリズムを楽しむ。

「きらきらぼし」

高田三九三／詞、フランス民謡

フレーズの最後にポーズをしたり、ステップの方向を変えたりする。また、ボードに描かれたクリスマスツリーにフレーズに合わせて星をつけていくなどの遊びを楽しむ。

④音や声、リズムを利用しての動きや模倣活動
〈参考例〉

「身の回りの動くものな〜んだ」

ホッチキスやはさみ、メトロノームや自動ドアなど身の回りのものの表現を楽しむ。

「な〜いたないた」

「お〜ちたおちた」という遊びのアレンジで、「な〜にがないた?…鳥、犬、自動車、たいこ」などの問いに鳴き声で答えるという遊びで、いろいろな声を楽しむことができる。

「ひるか よるか でんちゅうか」

わらべうた

わらべうた遊びを楽器遊びに応用した試みである。サークルになり鬼が目隠しをして真ん中にすわる。鬼の周りを楽器を持ったまま回り、鬼が〈ひる〉と言ったら持っている楽器を大きく鳴らす、〈よる〉と言ったら小さく鳴らす、〈でんちゅう〉と言ったら音を立てずその場でじっとしておくというルールで、それに対して鬼は音の鳴っている方向に動き相手を捕まえる、という鬼ごっこ遊びと音遊びが一緒になったものである。

⑤リズム体操やリズムダンス

前述を参照

⑥総合的な表現活動

〈参考例〉

絵本「のせてのせて」(松谷みよ子作 童心社)の読み聞かせから、表現活動への発展。「がたがたバス」(志摩桂/詞, フィンランドのあそびうた)を歌いながら運転手になって山の遊園地に出発。「ストップ!ねえねえ私も乗せて!」とウサギ, きりん, ぞうが順に出てくる。「ウサギさんが乗るとバスがびよんびよんはねるよ」「きりんさんはお首がバスから出ちゃうから, 木にぶつからないようにそうっと運転してね」「ぞうさんが乗ると重くてなかなか動かないね」などと声かけをしながら運転手ごっこを進め, 活動の途中で〈楽器広場〉や〈遊びの広場〉などの広場遊びを挿入したりして活動する。

以上, 分類項目毎に実際の活動例の要約を述べたが, 筆者の企画した「保育者のための総合音楽講座」において, 前述の活動例のような音楽表現の他に, ことばや手作り楽器によるリズムアンサンブル, いろいろなピンを使っての創作音楽, 指揮者体験やボールや風船を使っての歌遊びなどにも取り組んだ。限られた時間の中で多くの内容を取り扱うことは難しく, 必要と思われる内容の選択に苦慮した。また, 保育者にとって保育を終えてからの研修は時間的にも体力的にも負担が大きいため, 講座の継続企画には日程等十分な計画性が必要であると痛感した。しかしながら, 参加者たちは意欲的かつ積極的に講座を受講したため, 各講座では発言や質問も活発に交わされ十分に充実したものであった。加えて, 講座終了時に受講者対象にアンケート調査(自由記述形式)を実施したので, その中からいくつかの感想を紹介することにす

る。「音楽が身近なところ, 生活の中にたくさんあるところがあるのでそれをどれだけ拾えるかが大事だと思った。」「音楽の感じ方の幅を広げることが大事だと思った。」「体を動かすことで, 次第に身につく自分のものになったと思う。」「身近な教材や物を使っていろいろな遊びがで

きることを知り, 工夫をすればいろんなことができるんだなと感じた。」

「体を動かすことで, 発散できるものがあったり, 他の先生との交流を楽しめたりできた。」

これらの感想からも, 筆者の音楽表現活動の内容分類や保育実技書の調査が今回の講座に生かされていることを窺い知るとともに, 研修に対する理念の方向性を確信することができた。

おわりに

筆者は, グループ形態における保育者を対象とした音楽研修や音楽の再体験について, 「音楽と動き」という視点から前述のような研究と実践をおこなってきた。しかし, 保育場面では様々な音楽表現活動の実践形態が考えられるため, そのひとつひとつに対応した研修をおこなうことは困難であると同時に保育者自身が音楽研修に求めるものとして, すぐに園で使える教材の提供などを中心に講座内容を計画することも一時的な解決にしかならず, 音楽の文化性や民族性を保育者に伝えるには至らないと考えるのである。

今回, 保育現場における音楽表現活動の「音楽と動き」を中心とした内容分類をもとに, それぞれの項目毎により実践的な講座内容を考案することが可能となった。また保育者にとっても, 項目と関連しながら様々な活動や遊びについて動きを伴いながら実体験することは, 保育者自身が音楽表現活動の基本的な役割を意識することにつながり, 身近な教材の再認識や利用方法についての再考が可能になると思われる。つまり, 保育者自らが, 動きを通して音楽表現活動の中に自分自身の感性を見出し文化の素養を養うことで, 子どもたちの心に響く表現活動が実現できると考えるのである。

〔参考文献〕

仲嶺まり子「保育者のための総合音楽講座報告」『初等教育—研究と実践—』別府大学短期大学部初等教育科児童学会 2004

- エルザ・フィンドレイ (板野平監修, 小野進訳) 『リズムと動き』全音楽譜出版社 1973
- F・Wアロノフ (畑玲子訳) 『幼児と音楽』音楽の友社 1990
- エリザベス・バンドゥレスパー (石丸由理訳) 『ダルクローズのリトミック』ドレミ楽譜出版社 1996
- 板野平 『リトミックプレイルーム』ひかりのくに 1975
- 日本フォークダンス連盟 『幼児のリズムあそび』フレーベル館 1975
- 芸術教育研究所編 『乳幼児の教育3号』黎明書房 1979
- 多志賀明 『花いちゲーム』黎明書房 1978
- 板野平, 広瀬蓉子, 石丸由理, 長尾満里 『みんなでやるうりトミック』ひかりのくに 1982
- 松本民子 『幼児のリズム体操集』チャイルド本社 1981
- 阿部直美 『0~5才児の手あそび歌あそび』ひかりのくに 1984
- 野上俊之, 神原雅之 『リトミックコーナー』チャイルド本社 1987
- 中村明 『たのしいリズムあそび』チャイルド本社 1987
- 板野平, 鈴木明子 『リトミック12ヶ月』チャイルド本社 1988
- 定成淡紅子 『リトミックであそぼう』基礎練習編, 音楽あそび編, リズムのおけいこ編, 器楽合奏編, 心のやすらぎ編, 全音楽譜出版社 1990~1994
- 湯浅とんぼ 『ふれあいあそびうた』チャイルド本社 1990
- 石井亨, 江崎正剛 『たのしいリトミック』1~3巻創芸書房 1992
- 五味克久 『リトミックベストテン』アド・グリーン企画出版 1993
- 笹井邦彦, 神原雅之 『イメージ音楽で遊ぼう』フレーベル館 1993
- 小谷隆真 『あたらしい表現あそび』すずき出版 1994
- 丸山政敏 『ヒット曲でリズムあそび』チャイルド本社 1995
- 石丸由理, 吉田紀子, 輪島直幸 『レッツ・プレイ・リトミック』アド・グリーン企画出版 1995
- 新沢としひこ 『あそびうただいすき』すずき出版 1996
- 田村忠夫 『Let'sじゃれきんぐ!』チャイルド本社 1998
- 笹林由加 『リトミックちゃんはじめまして』共同音楽出版社 1998
- 阿部直美 『だ~いすき手あそび106』メイト 1996
- 黒岩貞子 『だれでもリトミック』アド・グリーン企画出版 2002
- 石丸由理 『リトミック百科』ひかりのくに 2003
- こばやしけいこ 『あたらしいリトミック』ドレミ楽譜出版社 2003
- 坂本真理子 『こんにちは!リトミック』オブラ・パブリケーション 2003
- 井上伸子 『リズムあそび曲集』音楽センター 2004